

Vol.16 子宮内膜症

子宮筋腫とともに女性に多い婦人科系の病気が子宮内膜症。症状によっては、不妊を招くこともあるので注意が必要。正しい知識をもって対応することが大切です。



教えてくださったのは
宮沢あゆみ先生

あゆみクリニック院長。早稲田大学卒業後、TBSに入社し、政治部や外信部の記者として活躍。その後、東海大学医学部に学士編入学し、医師に。米国や都内の病院勤務を経て開業。

子宮内膜が子宮以外に転移し、増殖と剥離を繰り返す疾患

子宮内膜症とは、本来は月経のたびにはがれて体外に流れ出す子宮内膜組織が、子宮以外の場所に転移して増殖する疾患です。転移した内膜組織も、月経周期に合わせて増殖と剥離を繰り返して出血しますが、血液を体外に排出できないため、その場にたまって臓器や組織の癒着を引き起こします。

転移しやすい場所は、卵巣や卵管、子宮と直腸の間(ダグラス窩)、腹膜などです。まれに子宮から離れた肺などに

転移することも。特に多いのが卵巣やダグラス窩への転移です。卵巣に転移すると、月経のたびにそこで出血を繰り返すため、次第に血液がたまり、嚢胞を作りやすくなります。たまった古い血液がチョコレートのように見えることから、この嚢胞を「チョコレート嚢胞」と呼びます。卵巣と子宮、腹膜などが癒着して動きが悪くなるため、月経痛が重くなったり、性交痛が生じたり、月経時以外でも痛みが生じることがあります。ダグラス窩や腹膜に転移した場合も周囲の臓器同士が癒着し、動きが悪くなると痛みを引き起こし、激しい月経痛や、性交痛、排便痛などが起こります。

このように、子宮内膜症の最大の症状は月経時の強い痛みです。子宮内膜症は、月経がある年齢の女性なら発症しうる疾患です。10代後半から加齢とともに増え、40代前半がピークで、閉経を迎えると減ります。子宮内膜症の原因ははっきりとわかっていません。ただ、現代は晩婚化が進み妊娠回数も少ないことから、月経回数が多く、常に女性ホルモンにさらされていることが発症の要因と考えられます。現代病ともいえる疾患です。

不妊につながるので、激しい月経痛がある人は受診を

注意すべきなのは、子宮内膜症は不妊を招く場合があることです。特に卵巣や卵管に内膜症がある場合には、卵巣と卵管が癒着して卵子をキャッチし

にくくなったり、卵管が閉鎖して受精しにくくなるため、不妊につながります。また、チョコレート嚢胞は、放っておくと卵巣がんになる可能性もあります。激しい月経痛や性交痛、排便痛がある人は早めに受診しましょう。

子宮内膜症を発症しても、症状が軽ければ経過を観察します。症状が重い場合には、薬でホルモン分泌を抑えて、一時的に閉経状態を作る「偽閉経療法」や、妊娠中のようなホルモン状態を作る「偽妊娠療法」を行います。低用量ピルで進行や症状を抑える場合もあります。これらで改善しないときには、手術を行う場合も。特にチョコレート嚢胞が原因で不妊を招いている場合は、手術によって嚢胞を摘出し、癒着や卵管のつまりを解除することで妊娠率が高まるため、手術をすすめる場合もあります。

ちなみに、妊娠をすると月経が止まるので子宮内膜症は改善します。このため、子どもを望む人には妊娠をおすすめする場合もあります。子宮内膜症は、いったん発症するとなかなか完治せず、手術をしても再発することが多い疾患です。また、薬による治療をしているときは妊娠できないので、年齢や妊娠の希望、症状の程度を考慮して治療方針を決める必要があります。このため、よく話を聞いてくれる医師を選ぶことが重要です。自分のライフプランを考えて、症状と上手につきあっていきましょう。

信頼できる医師のもとで治療方針をよく話し合うことが大切

